

六 巨樹にふれて　　ある樹木医の体験から

「このセンダン、ちよつと元気がないのじゃないかしら。」

「どうも昔に比べて、勢いがなくなってきたようだねえ。」

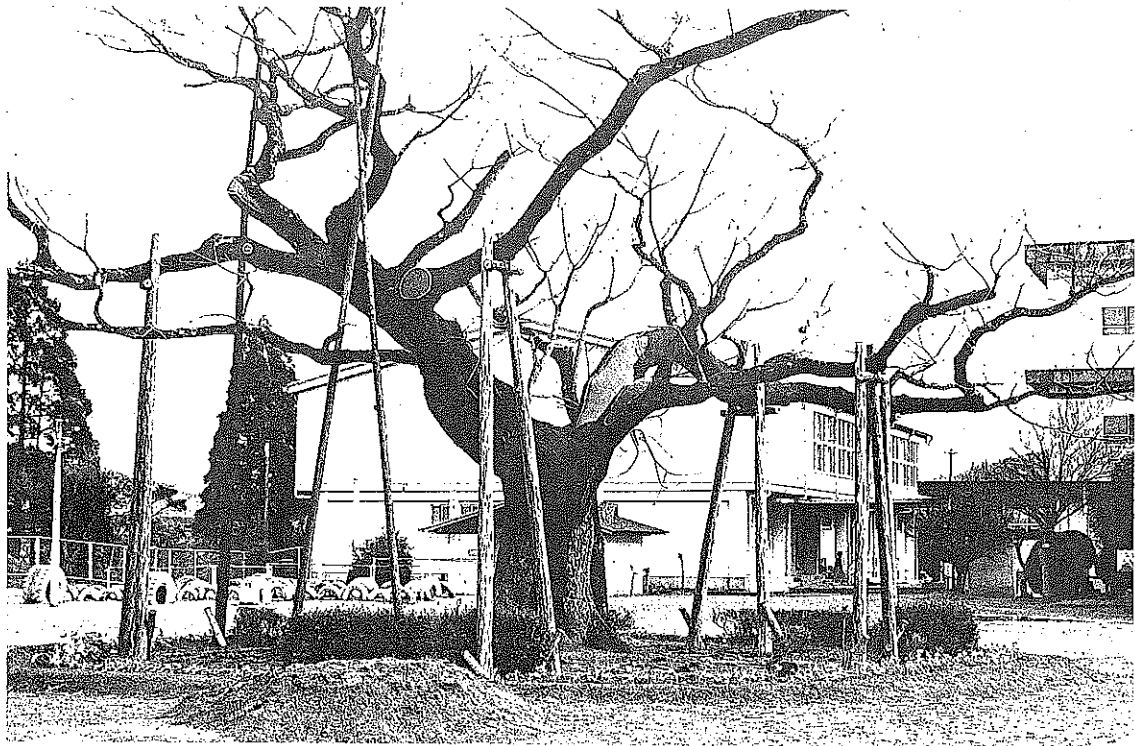
「この木の陰で遊んだりしていたのに、葉っぱが少なくなってきたなあ。」

夏休みの奉仕作業をしていた細田小学校の保護者たちは、校庭のセンダンの木を見上げながら、心配そうにこんな会話をかわしました。

細田小学校では、約百年前の学校創立のときに、校庭にセンダンを植えました。この木は学校のシンボルとして、子供たちの心のよりどころとなっていました。校歌にも歌われ、細田地区の人たちも「センダンを守る会」を結成して、大切にしてきました。

そのセンダンが、ここ数年で枯れ始めてきたのです。人間が年を取ると体が弱ってくるように、樹木も樹齢を重ねることでしだいに勢いが衰えてきます。特に根の部分はいつも踏まれているので、水あげが悪くなり、木全体がもろくなってくるのです。さらに、数年前の台風で枝が折れ、そこから細菌さいきんが入ったために、中が空洞になってきていました。どう対処すればいいかわからず、そのままにされていたところ、いよいよ木の勢いがなくなってきたのでした。

そんなとき、樹木医制度を知った「センダンを守る会」の人たちが、わたしたち樹木医に診断を依頼してきたのです。



治療の終わった細田小学校のセンダン

「樹木医」とは全国各地の巨樹、名木、古木など緑の文化財ともいえる貴重な樹木の樹勢を回復させ、保全する、いわゆる樹木の医者のことです。

適切な治療を行えば樹勢の回復は十分に期待できると、わたしたちは診断しました。しかし、その治療には相当な費用が必要でした。「センダンを守る会」の人たちは募金活動を行い、五年がかりでその費用を集めました。そして、わたしたちに再度、センダンの木の治療を依頼してきたのです。

わたしたちは専門家としての立場から、外科的な治療を行いました。空洞化したところをウレタンでふさぎ、枝の折れ口には殺菌剤をぬって、くさらないようにしました。樹勢を回復させるために、根の部分に有機肥料をほどこして土壌を改良しました。また、根をこれ以上傷めないようにさくで囲み、さらに、木全体を支柱で支えました。

こうして細田小学校のセンダンは、みごとに復活したのです。若々しい葉がびっしりと茂り、枝ぶりもしっかりしてきました、以前にも増して堂々たる姿になってきました。

県内には、わたしたちが診断治療を行った巨樹、古木がこのほかにもたくさんあります。主なものとして、山之口町十輪寺のモミ、西都市都万神社のクス、木城町比木神社のチシャノキ、北浦町のシイノキ、高千穂町の天真奈井のケヤキなどがあります。

これら神社やお寺などの巨樹は、集落の貴重な緑の文化財として、氏子や檀家の有志によって世話がなされてきました。個人の家では先祖伝来の木として、また地域では地区のシンボルとして、心ある人々によって大切に守られてきたのです。

ですから、そのような巨樹の治療にたずさわり、治療後しばらくたって樹勢を回復した姿を見た時ほど、樹木医としての生きがいと誇りを感じることはありません。

枝は青々と若葉をつけ、空洞になり枯れかかっていた部分は新しく形成層が盛り上がり、木肌もなんとなくみずみずしくなっています。治療前の今にもくちはてそうな弱々しい姿からは考えられないような、たくましく力強い姿になっているのです。巨樹がまた元気になったことを喜ぶとともに、自然のもつ生命の不思議さ、強さを感じます。

貴重な巨樹、老木の分布状況を調査し、それらを治療管理するのもわたしたち樹木医の仕事です。先日、県央の山中にかなり大きなスギがあると聞き、たずねて行きました。車を降りて、尾根伝いの林道をたどって山の奥深くへ入っていきまると、突然、目の前にその巨大な姿があらわれました。一瞬、息がつまりそうな気持ちになり、しばらく私はそこに立ちすくんでしまいました。まっすぐに天まで伸びた幹は、大人が四人で両手を広げてかかえて

も、かかえきれないほどの大きさです。根は力強く地面に広がり、太い枝を四方に伸ばしています。ごつごつした木肌にはこけが生えていて、永遠の命が感じられます。その勢いに圧倒されたわたしは、おそるおそる近づいていきました。幹に聴診器をあてると、



水を吸い上げる音でしょう、ザーツという音が聞こえてきました。このスギは生きているのです。尾根筋の、土地も気象も最悪の条件の中で、なぜこの木がここに残ったのでしょうか。自然の不思議さ、すばらしさを改めて感じました。そして、長い年月を耐えて、たくましく生き続けてきた巨樹は、まさに時代の証人であり、自然界の歴史そのものという気がしてきました。わたしたち人間の想像をこえる生命体、それが巨樹なのです。